松江市史講座（2014年7月19日）

朝山日乗～戦争と平和～

原　慶三

1、「日乗」以前

・明応２年（1493）以前に朝山次郎（神祇伯白川家出身）が「佐陀大社」兼神主となる。
・明応４年（1495）以前に佐陀大社縁起が作成される。【七】【八】
・永正２年（1505）、塩冶氏・両国造家の掌握と養子・婚姻関係
　→　経久女子と北島国造との結婚（永正４年以前）
・永正５年（1508）、尼子経久が杵築大社造営を宣言（～永正１６年遷宮）
　永正１０年（1513）、尼子経久の嫡子政久が討死
・永正１２年尼子経久が開版妙法蓮華経を作成
・大永２年（1522）、尼子経久が第一回目の杵築での万部経読経を行う。【一〇】【一一】【一二】
　石見国へ攻め入り、江川東部を制圧。翌年には江川西部に攻め込み、大内氏と濱田で対陣。【一四】
　佐陀神主朝山安芸守利綱が杵築社三月会頭役注文を尼子氏に提出。【六】
　この頃、朝山善茂（日乗）誕生か。
・大永３年（1523）、神魂神社神主をめぐり、千家・北島両家が対立し、亀井秀綱の裁定で、北島方が勝利。初めて秋上氏が神魂神社神主としてみえる。
　秋上氏が神主方と武家方に分かれ、尼子氏家臣に組み込まれる。
・大永４年（1524）、杵築社に大日堂が建立される。
　日御崎神社修造勧進簿が作成される。
・大永６年（1526）、杵築で２度目の万部経読経か？
　尼子経久が日御碕神社検校を直状で安堵。
　翌年に石見・安芸・備後へ軍事行動
・大永７年（1527）、杵築社に三重の塔が建立される。

・享禄２年（1526）、６月２８日に尼子経久が佐陀神社に社参。【九】
・享禄３年（1530）、杵築で３度目の万部経読経が行われるが、この直後に塩冶興久の乱が勃発。【一三】【一四】
・天文元年（1532）、宇山氏が経久から美作国内に所領を与えられる。【二四】
・天文６年（1537）、新たに当主となった尼子晴久が杵築大社造営を開始するが失敗。
　清水寺に出雲国の法事で左座であることを認めた綸旨が出される。【一五】
　尼子経久が成相寺の応永３年２月９日置文を安堵。
・天文７年（1538）、６月２４日に尼子晴久が社参。【九】
・天文９年（1540）、杵築大社に一切経堂が建立される。
　安芸・吉田の毛利氏を攻撃するが、成果を上げられず、翌年１月に退却
　天文１１年から１２年にかけて大内氏が出雲国を攻撃するが失敗
・天文１２年（1543）、この頃、朝山善茂が兄とともに備後国（山名理興のもとか）へ派遣される（神魂神社秋上氏との共通性）。
　☆備後国は南北朝期に朝山景連が守護を勤めていた。
・天文１８年（1549）、大内・毛利氏の攻撃により備後国の拠点が攻め落とされ、美作国へ移る。
・天文２１年（1552）、尼子晴久が、出雲・隠岐・美作等６ヶ国の守護の補任される。
　美作国には早くから朝山氏の一族宇山氏が派遣されていたが、次いで晴久の従兄弟誠久が派遣される。
・天文２３年（1554）、尼子国久・誠久父子を初めとする新宮党が晴久により滅ぼされる。
・天文２４年（1555）、尼子晴久が修理大夫に補任され、杵築社・日御崎・揖屋社に所領を寄進。
　この年、法事における清水寺左座に不満を持つ鰐淵寺が、朝廷から左座の綸旨を獲得。【一五】

2、「日乗」以後【一】【二】

・弘治元年（1555）、作州朝山が上洛し、上人号を与えられる。【三】【四】
　晴久は清水寺と鰐淵寺の裁判をこの年５月までに決着させることを求める。
　三問三答で清水寺左座が認められるが、その後の支持勢力の働きかけで二転し、最終的に翌年に清水寺左座が確定。

・弘治２年（1556)、５月に禁中小御所で仁王経百部読誦事、「日乗上人と云う買子（マイス）申し沙汰云々、奇代事之在り」（厳助往年記）

日乗の活動【一④】

・永禄５年（1563)、８月には毛利元就・隆元が、赤塚氏の毛利氏への入魂については日乗から聞いているとして三〇石の地を与えるとする。【一六】

１２月には、毛利氏家臣小倉氏が、別火の愁訴に対して所領を与えることを日乗が口羽で両国造の使者に伝えたことを述べている。【一七】

三月会の社役の執行について、日乗が裁定し、柳原氏が勤めることになる。【一八】

・永禄６年（1564)、１月末に日乗が安芸国より上洛【一九】。２月には日乗の寄附で小御所で一七日間にわたり百座の仁王経読誦が行われる。「武家よりの申し沙汰分也、内儀は日乗上人馳走云々、安芸金山庄禁裏御料所に森［毛利］進上云々」（厳助往年記）

「言継に御室宛に三〇疋と書状を言付け、芸州へ下向」（言継卿記２月８日条）

３月末までに、朝山二郎左衛門方が本庄に同意したとして切腹させられる。【二〇】

６月には豊芸和平の儀で日乗が大友氏側に働きかける（立花家文書)。

９月には断絶した朝山家を復活させる。【二一】【二二】【二三】

・永禄１１年（1569)、日せう上人ろうよりめしいたされて、かたしけなきとて十てう、とんすしん上申、御れいにまいる（御湯殿上日記、４月１６日条)。

９月に信長が入京すると、日乗はその家臣となる。

・永禄１２年（1570）１月、 毛利・大友の和睦の使者として聖護院道増、上野信恵、一色藤長らとともに日乗が派遣されることとなったのをうけて、松永久秀が吉川元春に書状を送り、「委曲日乗上人演説たるべく候」と記す（吉川家文書)。

４月に日乗を総奉行（後に村井貞勝を副奉行）として内裏修造が始まる。

６月には尼子勝久らが隠岐国をへて出雲国に上陸。

・元亀２年（1571)、８月に尼子勝久らは隠岐へ脱出。

９月、朝山日乗をして、御生母贈皇太后（栄子）五十回正忌の資を、丹波の諸士に徴せしめらる

・天正元年（1573)、１２月に日乗が信長の代官として皇室領丹波国山国庄へ入部（御湯殿上日記)。荘園への侵略を防いだ上で日乗に入部を命じる。

この頃、山中鹿介が信長に援助を依頼。

・天正３年（1575)、３月に日乗が失脚？（以後の史料から見て誤りであろう）

信長より日乗きょうてうをしよくするするほとに、てんさいというへきと申し入れ候（御湯殿上日記３月２５日条）

１１月７日には日乗の子久綱が信長から山城柳原で２０石の地を与えられる。（京大・朝山家文書）

・天正４年（1576)、１月に三位法印典斎（日乗）が山科言経を礼問（言経卿記１月５日条、言経は言継の子)。

２月には前夕安土に帰った信長から日乗を使者に公家衆の参向見合いについて申し越してきた（言継卿記２月２６日条）

・天正５年（1577）９月１５日、日乗が死亡する（朝山氏系図、５０才代か）